

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.10

歴史資料から
— 時を超えて
つながる —



吉岡晶子



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」第10回は、歴史と保育をつなぐ内容です。筆者は本園で長く保育に携わり、退職後に園の歴史資料をひもといてこられました。旧職員の先生方数名で「歴史チーム」として作業を続けてくださっています。本園には歴史資料に関する問い合わせが折々寄せられます。昨年度は、テレビ番組で「青い目の人形メリーさん」の写真を使いたいという依頼があり、一昨年度は、園長室に置かれていたブロンズ像を、山形天童の美術展に貸し出しました。他にも、論文執筆のための資料の問い合わせがあると、「歴史チーム」の先生方や学園図書館に必ずご相談しています。

吉岡氏が今回、歴史資料の引き出しを開けて、示してくださった様子は、今コロナと共に暮らす生活の中で感じる思いとも重なることがあって驚かされます。読者の皆様も、あらためて感じるものが多々あるのではないのでしょうか。

*

吉岡晶子（よしおか あきこ）
元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

附属幼稚園を退職後、園にある資料整理のお手伝いをするようになった。本園の明治、大正時代の資料は関東大震災の被害で数少なくなってしまったが、写真・日誌・会議録・研究会資料等が園長室の棚に収められていた。「これは?」「いつから?」など知りたいことがあっても、日々の保育をしている中では歴史をたどったり調べたりすることはなかなかできなかった。この機会に、後世の人が資料を活かせるようにと思い、整理を進めた。

資料には「こんなものがある!」「こんなことが書いてある!」など興味深いものがたくさんあり、園庭の写真を見て「砂場の深さが違う」と見に行ったり、「この木は今どうなっているのだろうか」と確認したり、寄り道脱線することもたびたびあった。

その中で印象に残ったのは、日誌（註1）に書かれた昭和7年12月の記録。お茶の水の仮園舎から大塚の新園舎への引っ越し（註2）のことが書き

記されている。57年続いた地から移転する大事業、暮れとお正月を挟んでどのようなされたのだろうか、さぞや大変だっただろうと目を通した。一部を抜粋してみる。

移転に関して

昭和七年十一月廿四日より廿五日にかけて庭の主なる樹木を大塚に移す。

廿五日 バラックの最後の写真をうつし置く。

(十二月) 十六日 金 晴

(前略) 本校のがすんでから手があいて居るので、一日も早くとのこと。主事(筆者注…倉橋惣三先生)に電話かけて、二十二日と決める。後又計理から電話で、二十日を十九日にして(筆者注…終業式のことか)、二十一日に移転してはとのこと、交渉したり。それでよいとの由。これにて移転は愈々二十一日と決定。(後略)

十九日 月 晴

幼児はすぐに帰る。

今日をいろいろの催しで各室が計畫して居たのに、急にすぐお帰りと、変更になってしまったので、短い間にお昼の買物やら、自分の荷物つみややら、お引越のおはなしやら、お正月のお休みの事、こ

ばれる程の思ひを風呂敷につゝみ込んでうれしうに帰って行く。

幼児が帰ってしまったて、さてその後で相談しながら食事。午後荷造り。多勢のことゝて、夕方迄に大部分出来上る。

二十日 火 晴

(前略) お晝にはピアノ、オルガン等楽器類がまづ第一に大塚へ行った。

神原さん、実習生を十二人つれて大塚へお掃除に。この時会計より車があいたから今日運べるものは運ぶからとのこと。一台送る。書籍戸棚類を。又一台。

かうして次々運ばれると神原さん一人では困るかも知れないからとのこととりあえず新庄がすぐそのまゝ、車で大塚へ行く。受け取った荷を夫れくゝの室に人夫に置いて貰ふ。

暗くなりかけてから二台出たとの知らせ。一台はすぐ来たが一つはなかゝ来ない。新庄は一旦お茶の水に帰る。

荷物のないあき室に、荷を送ってからついで今迄みなさんとお茶をのんでいらした由。主事は後迄まってるて下さった。一寸大塚でのお話をした。たった一人になった神原さんの上を案じて、主事はそれから又大塚へお出かけになった。(後略)

二十一日 水 晴

(前略) いよゝお茶の水から大塚へ移轉の日。お天気がよいのでまづよかつたが、大層寒い日で殊に北からの寒い風で困る。

八時に大塚についた。またトラックは来ないので、グランとした室に荷を待つ。腰かけもないし、水も出ないし、ストーヴの工合も悪いし。(中略) 次々届く沢山の荷物。よその部に見られぬ面白きものが多いので、人夫など珍らしがりて運ぶ。菓子、みかん、塩せん等にておやつ。

お茶の水より電話にて、とても今日は終らないので、このまゝ、帰るとのこと。

金庫、五時ごろ届いたが、職員室迄これから一時間もかゝること。主事一人おのこりにて、一同は帰る。

トラック、十九台。

廿二日 木 晴

今日は少しはあたゝか。

午前中にトラック四台の荷が到着。

十二時ごろにはお茶の水から皆さんがお出で、これでいよゝお茶の水とは完全に別れてしまった。みんな揃ってこゝで晝食。今日はお茶も十分にのめた。

困ったことに、便所が使用出来なくて、(水が出

ないので）はるか離れたプールの側まで行かねばならない。寒い風も一通りではないので、このつらさ。

今日で殆んど荷の大体が落ついたので、めい／＼の室や、自分の机などの整理が出来た。

廿三日 金 晴

寒き風。

今日はかたづけものなどにて大したこともなし。

そこ、こゝきれいになりたれど、見なれたる、持ちなれたる棚、机等なれど、落つかぬこゝちは致し方もなし。

昭和八年 一月八日 日

日曜なれど、明始業式の準備に集る。

まづ遊戯室の掃除。つゞいて椅子をならべ式の支度。

携帯品室、下駄箱、便所等にそれ／＼の名札を貼りおく。この新園舎に始めて幼児を迎ふるに保育室の準備も出来たれば午後より職員會。

主事室の大きな角テーブルを圍んで初の職員會。諸氏それ、つとめよ、など、いはるゝに、この言葉、この主事より聞くが可笑しとてみな思はず笑ひ出し、然しそれにふさはしく、一寸角ばりたるこなしにて是に應へたり。（後略）

この日の職員写真がある。子どもたちを迎える準備の

仕事は、現在も同じように脈々と続いている。「同じ！」と昭和8年の映像が浮かんで来た。



▲昭和八年一月八日 新園舎保育始めの日（『お茶の水女子大学附属幼稚園創立140周年記念誌』P35に掲載）

十八日 水 晴

主事室にめい／＼たんすを置き、夫れ／＼の抽出しに札を貼る。水曜は主事、お茶の水に授業あり、この帰り道にて花鉢を求めらる。咲き盛りなるシクラメン、目もさむるばかりあてやかなり。

引つ越し日が決まったのが1週間前とは結構ぎりぎりのスケジュール。急に終業式の日を変更するとは大変、焼け跡から再生したという藤はこの日にひと足先に来たのか、記録者は文脈からいって新庄先生かしらなどと、会議の記録も書いてあるにもかかわらず、ついこのような部分に目が行ってしまった。同

じように保育に携わっていた自分と重ねてしまうのかもしれない。保育記録のような書き方だからなのか、倉橋先生とのやりとりやいきさつ、その時の様子が目に浮かび、先生方のエネルギー、忙しさやバタバタ感、シクラメンにホツとする気持ちも伝わった。

第壹保育期

四月八日 土

(前略) 庭の趣変りて、今迄の一ところのみ高きをくづして、なだらかな勾配となり、木も植えかえられたり。

櫻の一枝に花二三輪を見る。

十二日

遊具 杵登り、滑り台等備へつけられた。

十四日 金 曇

(前略) 櫻の大きいのが八本ばかり庭にはいつて次々植えられてゆく。目下植樹中 木の根の観察!! と揭示板に主事の字。

(十一月) 二十五日

森、川の組前の花壇を他に移し、こゝをテレスとする計畫、今日より工事に着手。

新年度の記録からは、園庭に遊具が設置され樹が植えられ、造り変えたりして徐々に整備されていることがうかがえる。

「櫻が八本！」確認したくなり園庭に行ってみた。お山に櫻の大木はあるが、数本ある他の櫻は幹の太さがまちまち。当時から木か、代替わりしている木なのか定かではなかった。

この歴史に残る移転については、『幼児の教育』にも連載で掲載されていた。^{註3} 倉橋先生、新庄先生、旧職員、保育実習科の卒業生、卒園生たちが幼稚園での思い出、当時の園舎のことや園庭のこと、保育の内容や友達のことなどを語っている。中でも旧職員の保育へのかかわり方については興味深かった。

「たより」(第33巻第2号 p 76) には、「移転について、住んでみてからの備へつけの数々、……夫から、夫からと、誠に忙しく、従つて風邪をひくといふ年中行事をしてゐる暇

もなく、一同元氣に過して居ります。」「新園舎に移りましてからはさすがに建物から受ける心境の變化とでも申しませうか、追憶もさる事乍ら、新興幼稚園の意氣大いに旺んで、……。倉橋先生はまめにお掃除に精を出したようので、「折角出来た主事室も席暖かならず……」など、1月8日の職員写真と共に記されている。

90年ほど前の記録から臨場感が伝わってきた。それは私が慣れ親しんだこの園舎園庭を背景にして想像できるからだろうか。

卒園して何年もたった元園児が幼稚園に来ると「変わってない」とよく言う。修理などして変わった所があるにもかかわらず、そう言われるのは、風景や色、匂いや雰囲気からだろうか。子どもたちもその時その時に味わったものがあるのだろうか。保育者もかつてここで過ごした子どもたちも、人や建物や環境、時間もひっくりかえって「幼稚園」でつながって

いるのだろうか。

どの園でも、その時その時に保育者は前を見て保育をし、幼稚園を創り、引き継がれてきている。その歴史を知ること、今の保育者を励ましてくれるように思った。

このようにあちこち道草しながらの資料整理はまだ継続中。時空を超えた体験を味わうことができることに感謝しつつ、資料と、今を生きる現場の先生方をつなぐ橋渡しをできたらと思っている。

注

- 1 『日誌三 自昭和七年一月 昭和九年三月まで 附属幼稚園』お茶の水女子大学附属幼稚園蔵
- 2 東京女子高等師範学校移転に伴い、附属幼稚園も文京区湯島から文京区大塚に移った。
- 3 『幼児の教育』第32巻第12号、第33巻第6号